(第3種郵便物認可)

県出身者ら「あきた寺子屋」

起業目指し意見交換

都内 本県での可能性探る

起業をテーマに意見を交わす（右から）首藤さん、鎌田さん、荒谷さん

本県での起業や秋田の資源を活用した新ビジネスを後押しする「起業創造塾 あきた寺子屋」が19日、東京都港区の都立産業貿易センターで開かれた。大学生を含む幅広い年代の首都圏在住の県出身者ら33人が参加。パネルディスカッションや分科会を通じ可能性を探った。本県ゆかりの企業・大学関係者らでつくる「秋田産業サポータークラブ」（藤盛紀明会長）の主催で、昨年に続き2回目。

パネルディスカッションでは藤盛会長が進行役を務め、3人が起業をテーマに意見を交わした。県産米を首都圏の消費者へ直販する「こめたび」（本社仙北市）の首藤郷社長（33）は「都会と生産地を結ぶ目的で事業を始め7年目。秋田の魅力を知ってもらう旅もコーディネートしている」と紹介した。

埼玉県で野ブドウを栽培し、ワイン造りなどの6次産業化に取り組む鎌田偉成さん（24）＝秋田市出身＝は「3年後には野ブドウの栽培面積を日本一に広げ、秋田の農家とも契約栽培したい」と計画を発表した。

東京でフリーライターとして働く荒谷未夏さん（46）＝大館市出身＝は、憧れの仕事を続けながら収入を増やすために起業を思い立ったとし、「秋田の食材にこだわったワインバーを経営したい」と夢を語った。

続く分科会では、参加者やサポータークラブ会員らが6班に分かれて意見交換。「半分は農業、半分は起業して別の仕事という働き方が秋田には合っている」「農業やエネルギーなどの資源を生かし、20年、30年後の日本を先取りするようなビジネスモデルを確立できないか」などの提案があった。（斉藤賢太郎）

シリーズ 時代を語る

再試合で「五輪切符」

茂木 優㉑

モントリオール五輪最終選考会プレーオフは昭和51（1976）年5月15日、栃木県足利市の足利工業大体育館で行われた。泣いても笑っても最後のチャンス。相手は選考会の決勝で負けた出河満男さん（自衛隊）で、同じ相手に2度負けるわけにはいかない。気合も十分に入っていた。

試合経過は今も鮮明に覚えている。第1ラウンド開始早々に得意の左正面タックルが決まり、バックに回りまず1点を先取した。すぐに腹ばいの相手を横倒しで立て続けに2度ひっくり返し、2ポイントずつ4ポイントを奪い、5−0と大きくリードして第1ラウンドを終えた。第2、第3ラウンドは攻めを捨て守りに入った。タックルされても全力でしのいだ。バックに回られても、防御には自信があったので、ひっくり返されることはなかった。最終的には5−4の僅差だが、私としては先行逃げ切りの作戦が効を奏した完勝だと思っている。

確かに守りの試合だった。試合後、秋田商高の先輩で日本代表チームのコーチを務めていた柳田英明さん（ミュンヘン五輪・フリー57キロ級金メダリスト）から「勝ってても攻めなきゃ駄目だ。それでは世界で通用しない」と厳しく怒られた。

それでも、どうしても五輪に行きたかった。これまで応援してくれた人、学校関係者、レスリング部の子どもたち、そして両親の思いに応えるためにも何としても勝たねばならなかった。勝った瞬間は、やったーといううれしさとともに、ほっとした気持ちも大きかった。

秋田に帰った時には、多くの人たちから激励を受けた。地元の協和町（現大仙市協和）では「五輪で頑張れ 茂木」の横断幕が掲げられ、激励会も開かれた。秋田商高の同期の仲間100人ぐらいが集まっての会もあった。「五輪でやってやる」との気持ちを新たにした。

五輪出場のため、東京に向かう。仲間が激励の横断幕を掲げてくれた＝1976年7月、秋田市の秋田駅

もてぎ・まさる　1950（昭和25）年、大仙市協和生まれ。元レスリング選手

整形外科公開講座

食事・運動でロコモ対策

秋田市 市民ら基礎知識学ぶ

ロコモの基礎知識や対策を学んだ市民講座

ロコモティブシンドローム（運動器症候群、ロコモ）をテーマにした整形外科市民公開講座が19日、秋田市の県民会館小ホール・ジョイナスで開かれた。県整形外科医会、県臨床整形外科医会、秋田医学会、秋田魁新報社、MSDの共催。市民ら約230人がロコモの基礎知識や対策を食事、運動などの面から学んだ。

秋田大大学院医学系研究科の宮腰尚久准教授が基調講演。「ロコモとは筋肉や骨、関節など運動器の障害のため移動能力が低下し、要介護になったり、要介護になる危険の高い状態のこと」と説明。日本では65歳以上の約4分の1の約700万人がロコモであると、注意を促した。

続いて、県内の整形外科医6人がパネルディスカッション。市立秋田総合病院の柏倉剛医師は骨を丈夫にする食事として、ビタミンDの多い魚やキノコ、ビタミンKを豊富に含む納豆などを多く食べることを勧めた。また、中通総合病院の成田裕一郎医師は骨の量や質の維持法としてウオーキングやジョギングの重要性を強調。「腕をしっかり後ろに振って肩の力を抜けば、腰や膝に負担がかかりにくい」などと、無理のない運動の仕方を説明した。（菅原潤）

北方領土問題を現地の視点で伝えた、長期連載企画「日ロ現場史」で受賞した北海道新聞社の本田良一編集委員は「両社の文化や領土問題について報道してきた経緯を乗り越え、合同企画をやるのは大変だった」と振り返った。

きょうの言葉

暑しともいわれざりけり煮えかえる／水田にたてる人を思えば

道歌

「太陽がギラギラと照りつける真昼に、煮えかえるような水田で、農作業に精を出す人のことを思えば、暑い暑いなどと言えたものではない」というのが大意。

気温の上昇とともに、誰もが口々に「暑い、暑い」を連発し、「あそこの木陰へ入ろう」「涼しいお店でしばらく休んでいこう」ということになる。

もちろん、それはそれでいいのだが、そうしたくてもそうできない人がいるということも忘れてはならないだろう。

この世にはさまざまな職業があるし、さまざまな労働形態があって、炎天下で働かなければならない人もいるし、高温の中で火を扱わなければならない人もいる。

というわけで、夏だからといって、誰もが冷房のきいた部屋で働いているわけでもないし、冷たい水を飲みたい時に飲めるわけでもない。

「そんなことは、言われなくても分かっている」かもしれないが、時としては、自分のことばかりではなく、そういう人たちのことも考えてみよう。

そうすることによって、炎天下でもその暑さをやり過ごすことができよう。

（コラムニスト・秋庭道博）

◆回収品に砲弾か　19日午後0時10分ごろ、北海道釧路市白樺台4丁目のリサイクルショップ経営者の男性（28）が、市内の住宅からの回収品から砲弾のようなもの1個を見つけ、釧路署に届け出た。にも、旧陸軍関砲の薬きょ